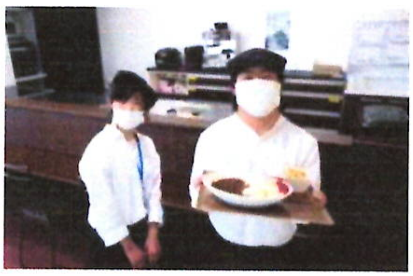
神戸新聞NEXT

2021/5/31 05:30　神戸新聞NEXT

記帳代行請け負う就労支援事業所　切れ目ない自立支援へ

税理士事務所から請け負った記帳代行に励む利用者ら＝三田市相生町　拡大



カフェスペースもオープンした＝三田市相生町　拡大

「ユニバーサルワーキング」の入る建物。放課後デイサービスも行っている＝三田市相生町　拡大

障害者の就労支援事業所「ユニバーサルワーキング」が４月、兵庫県三田市相生町に開所した。特別支援学校などを卒業した後、「ユニバーサルカレッジ」（専攻科）で２年間、パソコンなどを実践的に学んだ６人が通っている。担当するのは、税理士事務所から委託された記帳代行などの作業。記帳代行を請け負う就労支援事業所は全国でも珍しいという。（土井秀人）

「カレッジで学んだからこそ、記帳代行ができた。仕事をして稼げることは、本人たちの自信にもつながる」。ワーキングとカレッジを運営するユニバーサルグループ代表の野村ひろ子さん（６６）が話す。

カレッジは障害のある人が学ぶ「専攻科」として２０１９年４月に開設。高校や特別支援学校を卒業した若者に、自立支援事業として学びの場を提供している。２年制で定員は１０人。パソコンの文書作成ソフト「ワード」や表計算ソフト「エクセル」、調理、ダンスなどが習得できる。

その１期生６人の卒業後の受け皿として、同グループは今春、ワーキングをオープンさせた。利用者はダウン症や自閉症、知的障害があるが、エクセルなどを使って仕事に取り組む。

◇

従来、障害のある人は、特別支援学校高等部を出た後の進路が、就職か福祉就労にほぼ限られていた。ワーキングに通う男性（２０）の保護者は「障害のある子はなぜ、学校を出た後すぐに働きに行かないといけないのか。もやもやした気持ちがあった」と話す。別の保護者は「一番楽しい時期なのに、就職しか道がなかった」とする。

障害のある若者へ学びの場を提供する取り組みは、２００８年に和歌山県で始まり、全国へ広がっている。県内では、１１年に神戸市長田区でオープンした「エコールＫＯＢＥ」が先駆けだ。

同グループはエコールＫＯＢＥと連携する一方、１５年から発達支援が必要な児童・生徒が放課後に通うデイサービスも行っており、そこで培った教育プログラムも生かしているという。

◇

記帳代行は、税理士の顧客の通帳に記された取引記録をエクセルに転記する業務で、決算書の作成などに必要となる。ワーキングでは自社の顧問税理士から仕事を請け負い、１行当たりの報酬は１０円だ。

利用者は通帳のコピーを見ながら、丁寧にパソコンに入力。最後は職員が間違いがないかをチェックし、納品する。

発注した税理士の男性（５２）＝大阪府熊取町＝によると、大手に外注すると納期は早いが１行当たり２０円前後かかる。ワーキングへの発注は納期にゆとりをもたせているため、ほぼ半額に設定した。

男性は「通帳入力はどこの会計事務所にとっても手間のかかる作業で、パートを雇ったり、外部発注したりしている。急ぎの仕事でない場合、安いのは助かる。他の会計事務所でもニーズはあるはずで、障害者の雇用を広げるのには画期的」とする。ワーキング側

も、就労支援事業所の課題となる低い工賃の改善につなげたいという。

また、ワーキングでは、利用者や保護者らの集いの場としてカフェも開設。近くの三田モードビジネス専門学校などへ弁当も提供している。

野村さんは「グループとして、放課後デイから始まり、特別支援学校を卒業後に学べるカレッジ、その受け皿として働く場所のワーキングができた。子どもから大人まで、切れ目ない自立支援を目指したい」と話している。

■カレッジ利用者の保護者「社交的になった」「いろいろな体験してほしい」

「親友と一緒にカレッジに通って、青春を過ごせました」。利用者の男性（２０）の母親（４７）＝神戸市北区＝がほほえんだ。男性はダウン症で、２年間カレッジで学んだ後、記帳代行などの仕事にいそしむ。

２学年上の男性の兄は大学に進学していたが、男性の場合、特別支援学校を卒業した後の選択肢が限られており、「もやもやしていた」。息子の進路を決めるため就労支援事業所を何カ所も回った。そんな時、支援学校の友人男性（２０）＝同市北区＝に誘われてカレッジを知った。

母親は「息子はパソコンが全くできなかったけど、エクセルができるまでになった。カレッジで過ごした土台が、今につながっている」。恥ずかしがり屋という男性が、「最近、コンビニで店員さんに質問できたって。社交的になったと実感してます」と喜ぶ。

男性の母親も「いきなり仕事に就くのではなく、もっといろいろな体験をしてほしいと思っていた」。男性は自閉症のため、初めて訪れる場所が苦手というが、「２年間過ごした友達と一緒だったので、ワーキングに移る時も不安はなかった」と話す。

女性（２６）＝兵庫県三木市＝は特別支援学校を卒業後、別の就労支援事業所に通っていた。女性の母親（５２）は「環境の変化がきっかけなのか、それまで積み重ねてきた日常生活のことなどができなくなった。当時は表情が消え、感情がなくなっているようだった」と振り返る。もう一度、娘に楽しみや喜びを見つけてもらおうと、カレッジを選んだ。

今は笑顔も増え、楽しそうにワーキングに通う。母親は「カレッジを出た後、新たな施設に通うとなると、勇気もパワーもいる。そこでまた、という不安もよぎる。分かってもらっている中で働くのは、本人もやりやすく私も安心」と話した。

女性（２８）＝三田市＝も別の就労支援事業所を経てカレッジに移った。女性の祖母は「居場所があるという安心感がある。ずっと仕事が続けられたら」と願う。（土井秀人）

最も信頼性の高い自動車ブランド」マツダが1位の快挙、ト… PR(Ne